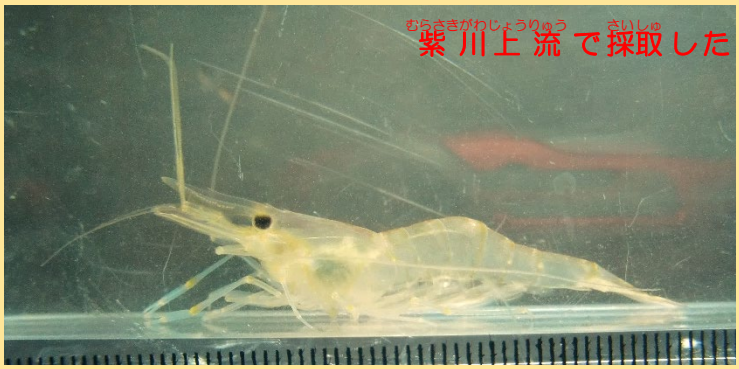
水環境館いきものトピックVol.15

珍魚報告シリーズ　謎のエビ!?

令和4年1月、紫川上流で見慣れないエビが網に入りました。私はあまりエビについて詳しくないのですが、よく見られる一般的な淡水エビとは違うと思い、持ち帰って調べてみることにしました。

基本的に淡水域で見られるエビは、テナガエビの仲間かヌマエビの仲間のどちらかです。テナガエビの仲間は、「モエビ」という呼び名で釣り餌に使用されるスジエビ類を含み、体に対して長い歩脚を持ちます。一方ヌマエビの仲間は観賞魚飼育のコケ取り役として人気が高く、体に比べて短い歩脚を持つグループです。



淡水域で見られるエビは通常、頭からお腹にかけて黒っぽい模様があり、その模様の形が種の判別の決め手になることも多いのですが、写真のエビには模様がほとんど見えません。河口域であればユビナガスジエビやシラタエビというほぼ透明のエビも見られますが、淡水域にここまで模様の薄いエビがいるとは聞いたことがありません。こりゃ分からん！ということで、模様以外の特徴を探すことにしました。

まず、歩脚の長さを見てみます。目よりも前にある尖った部位「額角」を超える長さの歩脚があります。この時点でヌマエビ科ではなく、テナガエビ科であることが分かりました。

続いて、その額角の形状を見てみます。テナガエビの仲間は、額角がふっくらとしており、よく見ると小さなギザギザがのこぎりのようについています。しかし、このエビの額角はふっくらしておらず、小さなトゲは３つほどしかありません。このことから、このエビはテナガエビ科のスジエビの仲間であることが分かります。

左写真）テナガエビの額角はゆるやかなカーブを描くようにふっくらしており、小さなトゲが並ぶ。

右写真）スジエビ類の額角は鋭い形状。また、小さなトゲも少なく、のこぎりのようにはならない。

では一体、このエビは何者なのか？薄い模様にライトを当てて観察したり、水生生物に詳しい方々に助言していただいた結果、やはりスジエビだろうという結論に至りました。ただ、相談に乗っていただいた皆さんも見たことが無いようで、比較的珍しい個体ではあるようです。この個体を採取した場所をしばらく探してみましたが、見られたのはこの１個体だけであり、何か他の地域のエビを放流して定着した可能性は（ゼロではありませんが）あまりなさそうです。また、いただいた情報によると、ごく稀に発色の薄いスジエビが見られる事もあり、おそらく個体差の範囲なのでは？ということでした。しかし、近年では釣り餌としてチュウゴクスジエビという別種が各地で定着しており、県内では2017年に多々良川でも確認されています。また、ヌマエビの仲間も釣り餌用のタエビとして様々な種類が移入され、各地で交雑などの問題を起こしているようです。

この個体に関してはあまりそういった心配はなさそうで、なかなか会うことのできないエビとの出会いでした。奇しくもこのエビを採取したのは筆者の誕生日で（永遠の19歳も8年目になりました）、何らかのプレゼントだったのかもしれません。不思議な出会いにドキドキもしましたが随分と頭を悩まされたプレゼントでした。

水環境館 RIVER MUSEUM

住所 / 北九州市小倉北区船場町 1-2
開館時間 / 10:00～19:00　休館日 / 原則火曜日(長期休暇期間中除く)・年末年始
お問い合わせ / 093-551-3011
指定管理者 / 玄海グリーン＆アドベンチャー共同企業体

http://mizukankyokan.jp